

「電波塔百選」選定の必要性

井出 明[†]

追手門学院大学経営学部[†]

1. はじめに

現在、棚田や滝などを始めとして、日本の景観遺産を“百選”として遺し、後世に伝えていこうとする動きが盛んになっている。このままでは失われかねない大切な日本の風景を遺そうとする運動であり、非常に重要なプロジェクトであるといえる。筆者もその趣旨に賛同しており、情報通信を研究する立場から、本報告では「電波塔百選」を選定する必要性について述べておきたい(注1)。

2. 電波塔の置かれている状況

一般に、電波塔が置かれている状況は、あまり好ましいものではない。特に携帯電話の電波塔は、電磁波を発生させ、付近住民の健康に悪影響を与える懸念が真剣に心配されており、一種の迷惑施設のような扱いである。

しかし一方で、東京タワーのように電波塔としての役割を終えたあとでも、高度成長期のシンボルとしての役割が認められ、積極的に保存に向かう動きも報道されている¹(注2)。

東京タワーのように、著名な建造物はもちろんであるが、地域を丁寧に見ていくと、残すべき電波塔も数多くあることが分かる。もちろん社会的文脈の中で残す価値のある電波塔も多いのだが、工学的な視点から建造物そのものの価値が認められる例もある。残念ながら、筆者は建築学の詳しい知識がないため、具体的な話は難しいのだが、電波塔の中には、工学的に興味深い構造を持った建造物も多いと聞く(注3)。建造物に社会的意義を見出して残す他に、純粋に工学的な価値からも残す電波塔があっても良いだろう。

3. 近代遺産と学会の役割

電波塔の多くは、高度成長期を象徴する建造物であるが、東京タワーを始めとして、電波を送る役割は相対的に低下しており、社会における機能を再検討する時期に来ている。

ここまで述べてきたように、「残すべき」電波塔はあるはずであるが、その選定には学術団体が積極的に関与して行くことが求められる。なぜなら、地域住民にとっては、地域に存在する

電波塔は生まれながらにそこにあるいわば“環境”に近いものであり、住民自身がその価値に気づくことは大変難しい(注4)。そこで、情報処理学会や電子情報通信学会を始めとする学術団体が、各地域に散在する電波塔の価値を見出し、相応の評価を与えることが肝要である。

実際、学術団体が各種の近代化遺産に特別な価値を認め、学術団体が持つ権威によってモノに意味を与える例は多い。情報処理学会においても、情報処理技術認定遺産の制度を有しており、歴史上重要な役割を果たした計算機等に、当該称号を付与している。

こうした学術団体による認定は、あながち単なる飾りというわけでもなく、実質的な意味を有する場合もある。たとえば、日本機械学会は機械遺産を認定しており、有名な例としては、札幌時計台の時計が挙げられる。札幌時計台は、しばしば「日本三大がっかり名所」というありがたくない称号で呼ばれることが多かったが、機会学会が時計台内部の時計を機械遺産として認定し、その時計に詳しい説明を付与するようになってから、見学者の時計に対する理解が深まり、少なくとも以前よりは当該施設の価値への認識が深まっていると考えられる。

このように、学術団体による権威付けは、単に儀礼的な意味だけではなく、社会的意義を有しているといえよう。したがって、電波塔の保全についても、関係学会は何らかの形で積極的に関わっていくことが求められる(注5)。

4. 国際的状況

広く世界に目を向けると、わずかではあるが、電波塔が世界遺産登録されている例も存在する。スウェーデンのヴァールベリの無線局がその例であるが、電波塔が世界遺産に認定されているということは、その文化的価値をユネスコが認めていることを意味している。これは、日本国内において電波塔を保全していく際の強力な論理になると考えられる(注6)。

5. 残すべき電波塔の例

筆者の研究分野は観光学であり、これまでにさまざまなフィールド調査を行ってきた。その中で、偶然価値ある電波塔に出会い、当該電

Necessity of 100 Selections for Radio Wave Towers

[†]Akira IDE · OtemonGakuin University

波塔の保全の重要性を認識したこともある。

例えば、長崎県佐世保市の針尾送信所は、日米開戦の際の「ニイタカヤマノボレ」を送信した施設として知られており、歴史上重要な意義を有する施設である。現在までのところ、この塔は倒壊の危険が少ないという事であり、しばらくはこのまま残るであろうが、将来的には地域資源として保全することが求められていくであろう。

ここでは一例しか挙げていないが、地域の宝としての電波塔は、発掘していけばまだまだ見つかるはずであるし、特に地方大学の研究者は、大学の地域貢献という観点からも、そのための労を惜しむべきではない。

6. 持続可能性と電波塔百選

電波塔に残すべき価値が見出され、一旦何らかの意味づけや権威付けが行われたとしても、保全にはどうしてもコストがかかる。このコストをどのように賄い、歴史的に意義のある電波塔を残していくかということ考えた時、観光資源として育てていくことも視野に入れるべきである。これまで、東京タワーやさっぽろテレビ塔など、観光対象として確立した電波塔も多いが、観光資源化される過程を精査し、他への応用可能性について探る必要性がある。

7. おわりに

ここまで、電波塔百選選定の必要性について述べてきた。こういったプロジェクトは、やはり学術団体の旗振りが必要であるし、今後、検討されることを願ってやまない。

脚注

(注1) 電波塔の社会的意義について、個人レベルでは、WEB サイト「送信塔見て歩き WEB」や書籍『アンテナタワー千一夜』などですでに言及されつつある²³。本報告では、それに加えて、学術団体や地域社会、そして公的機関があえて「電波塔百選」を選定する意義について考える。

(注2) 地域のシンボルとして機能している電波塔施設は、主としてテレビ塔に多く見られる。札幌や名古屋のテレビ塔は、テレビ塔としての機能もさることながら、地域のランドマークとしての役割を担っている。

(注3) 既述の東京タワーについては、鉄骨で組み上げた際に、力をどのように分散させるのかという点をはじめとして、土木・建築系の観点からも意義深い知恵が詰まっている⁴。

(注4) 地域の建造物の保全については、学

者・研究者の力だけではこれを果たすことが出来ない。建造物は、保全に多くの費用がかかるため、地域住民が積極的に自治体にその費用を捻出するよう働きかけることも重要である。さらに、建造物についてはその敷地も含めて日常の管理が必要となるため、ボランティアを中心とした地域住民のサポートなしでは、その存在を維持できないという点も忘れてはならない。

(注5) 電波塔の保全に関する学会の役割を考えた時、社会的な意義は工学系の学会では認定しづらく、建造物としての価値は情報・通信系ではなく土木・建築系が担ったほうが収まりがいいと感じられるかもしれない。このように、電波塔の価値を認めるにあたっては、複数の学術団体に関わる可能性があるため、その認定には骨が折れることが予想される。しかし、ここまで述べた通り、電波塔に価値を認め、後世に残していこうとする試みは重要な意義があるのであるから、各学術団体は一段高いレイヤーにおいて、相互に協力していかなければならない。

(注6) エッフェル塔を電波塔の範疇に入れる考え方も存在するが、エッフェル塔は建造段階では電波塔としての役割を担っておらず、後になって放送用アンテナが設置された。それ故、エッフェル塔を電波塔にカテゴライズするのであれば、放送・通信文化におけるその独自の価値を見出す必要がある。

参考資料

¹ 朝日新聞デジタル「東京タワー・出雲日御碕など登録文化財に 文化審答申」

<http://www.asahi.com/culture/update/1214/TKY201212140431.html>

(2013年1月10日確認)

² “送信塔見て歩き WEB”

<http://mitearuki.sakura.ne.jp/>

(2013年1月10日確認)

³ 北沢幸浩『アンテナタワー千一夜』創樹社 (2007)

⁴ NHKプロジェクトX制作班『東京タワー恋人たちの戦い 世界一のテレビ塔建設・333メートルの難工事 一男たちの飽くなき闘い』NHK出版 (2012) [Kindle版]